**復活節第3主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年4月14日**

**「信仰の目」**

**詩編146編8～9節**

**146:8 主は見えない人の目を開き／主はうずくまっている人を起こされる。主は従う人を愛し**

**146:9 主は寄留の民を守り／みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる。**

**使徒言行録13章4～12節**

**13:4 聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、**

**13:5 サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。**

**13:6 島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。**

**13:7 この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。**

**13:8 魔術師エリマ――彼の名前は魔術師という意味である――は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。**

**13:9 パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、**

**13:10 言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。**

**13:11 今こそ、主の御手はお前の上に下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。**

**13:12 総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。**

**4月に入り急に暖かくなりました。桜も咲き始めて春本番になりました。教会の花壇はチューリップが先週の水曜日にキレイに咲きました。パンジーも綺麗に咲いていてとても華やかになりました。今朝教会に来られてお気づきの方も多いと思います。**

**先週の木曜日の夕方のことです、私が執務室で仕事をするために階段を上っていると、外の花壇のあたりから人の話し声がするのです。私は「何かな」と思って2階の窓から下を見ると二人組の女性の方がキレイに咲いた花壇のチューリップの写真を撮っていたのです。私は邪魔をしてはいけないと思ってあえて声を掛けませんでしたが、なにかとても良い光景だなと思いました。教会がお花で綺麗にしているとそのお花の綺麗さに教会の敷地に入ってきてくれるのです。教会を綺麗にしているとそれだけでいい証しになるのだなとあらためて思いました。その女性の方々は今はお花の綺麗さにしか目が行っていないと思いますが、いつの日か教会に目を向けて、教会の扉を開けて、そして信仰の道に導かれるといいなと思います。**

**「本当に大切なものは目には見えない」は『星の王子様』の言葉ですが、教会には目は見えない本当に大切なものがある、私たちがこの人生を生きていくうえで目には見えない本当に大切なものが教会にあるということを知って欲しいなと思います。**

**アンティオキアの教会で聖霊によって伝道へと召し出され、聖霊によって送り出されたバルナバとサウロがいよいよ第一次伝道旅行に出かけた、その時の様子が今日の聖書箇所に記されてあります。舞台はバルナバの生まれ故郷のキプロス島です。アンティオキアを出発したサウロたちはキプロス島全体を福音を告げ知らせながら回っていきました。そして島の中心地パフォスに到着しました。島の中心地だけあってそこには地方総督、今で言うと県知事のようなローマ人のセルギウス・パウルスという人物から招かれて神の言葉を聞かせて欲しいと言われたのです。かつてコルネリウスに招かれたペトロのようにです。**

**サウロ（セルギウス・パウルスが異邦人ということで異邦人伝道にこれから力を入れていくのでユダヤ名のサウロからギリシャ名のパウロと呼ばれるようになります）、パウロは自由に福音を語ることができれば良かったのですが、それを妨げて地方総督が信仰に入ることを邪魔する人がいました。それがユダヤ人魔術師バルイエスです。彼は魔術師エリマとも呼ばれていました。バルイエスと魔術師エリマは同じ人物です。そのバルイエスは総督のお抱え魔術師として雇われていたのです。当時身分の高い人はお抱え魔術師とかお抱え占い師とかを雇って自分や国の行く末を占ってもらっていました。そのバルイエスがパウロが福音を語るのを妨げたのです。その理由は聖書に記されていませんのではっきりしたことは分かりませんが、恐らくはパウロたちが語るイエス様の福音を総督が信じるようになってしまうと、自分のお抱え魔術師という地位が危うくなる、解雇をされてしまうかもしれない、そうなっては困るので、総督がイエス様を信じる信仰の道に進まないように、信仰の道から遠ざけようとしたのです。**

**聖霊に満たされたパウロはバルイエスをにらみつけて言います。**

**「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。**

**今こそ、主の御手はお前の上に下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」（10・11節）**

**するとたちまちバルイエスは目が見えなくなり、誰か手を引いてくれる人を探して歩き回るはめになりました。その様子見を見て総督はイエス様を救い主と信じる信仰に入ったのです。**

**バルイエスは目が見えなくなったと記されています。8節では「地方総督をこの信仰から遠ざけようとした」とあります。パウロの厳しい指摘の10節には「お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか」とあります。「遠ざける」「ゆがめる」どちらも元の言葉では「曲げる」です。神様へイエス様へと続く信仰のまっすぐな道を曲げようとした、曲げて違う方向に進ませようとしたのです。**

**それはまさにかつての熱心なユダヤ教徒だったパウロがキリスト教会を迫害したときの姿と同じです。イエス・キリストを信じる人たちの信仰のまっすぐな道を一生懸命曲げようとしたのです。まっすぐな道を曲げること事が正しいことだと信じて、時にはそのために命さえ奪ってしまったのです。**

**その結果パウロはまさにバルイエスと同じように目が見えなくなってしまいました。目が見ななくなったパウロは手を引いてもらってダマスコの町に連れて行ってもらったのです。そこでイエス様を救い主と信じるキリスト教徒のアナニアがイエス様から遣わされて来て、祈っているパウロの上に手を置くとパウロの目からうろこが落ちて目が見えるようになったのです。それは肉体の目が見えるようになっただけでなくて信仰の目が見えるようになったことを意味するのです。それからパウロはイエス様を救い主と信じて信仰の道をまっすぐに歩いたのです。**

**今この時パウロはバルイエスにかつての自分の姿が重なったのでしょう。信仰のまっすぐな道を必死で曲げようとする愚かな姿、自分こそが正しい、自分だけが正しいと思い込み、その実は自分こそがもうすでに真実も何も見えなくなってしまっている、大切なものが何かわからなくなっている、そんな愚かなバルイエスの姿がかつての自分の姿と重なったのです。**

**だからこそパウロは言うのです。「お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう」（11節）目が見えなくなる、時が来るまでです。時が来るまで目が見えなくなるということは、時が来たら目が見えるようになるということです。かつてのパウロのようにいつかその信仰の目が見えるようになるその時が必ず来るということなのです。**

**時が来るまで目が見えなくなったバルイエスが歩き回りながら手を引いてくれる人を探したというのは象徴的な行為です。目が見えなくなり、まっすぐ歩けないバルイエスです。あっちにぶつかりこっちにぶつかり転んでしまうこともあったでしょう。立ち上がってまたうろうろとして曲がりくねりながらです。信仰のまっすぐな道を曲げようとしたバルイエスが、目が見えないためにまっすぐに歩くことができずに曲がりくねってうろうろと歩かざるを得ないのです。**

**パウロは言うのです。時が来たらそんなバルイエスの手を引いて「あなたの行く道はこっちだよ」とやさしく語りかけてくれるお方に必ず出会う時が来る。まっすぐな道に手を引いて共にその道を歩いてくれるお方が必ず現れる。そのお方こそがイエス・キリストである。それはかつての自分がそうであったように。優しく手を引いてまっすぐな道を共に歩んで下さるお方に出会うことによって、信仰の目が見えるようになる。本当に大切なものが何かわかるようになる。今は分からなくても必ずその時が来るのです。**

**50年ほど前に流行した歌ですが、渡辺真知子さんという歌手が歌った「迷い道」という歌があります。歌の内容自体は恋愛の歌ですが、「迷い道」というのが人生そのものを歌っていると思います。特にさびの部分「ひとつ曲がり角　ひとつ間違えて　迷い道くねくね」この部分って私たちの人生そのものだと思います。人生という道をまっすぐに歩みたいのだけれども、曲がるところを間違えてしまったり、曲がらなくて良いところで曲がってしまって、軌道修正しようとしてまた曲がるところを間違えて、結局人生の道で迷子のようにくねくねと曲がり続けてどこに行けばいいのか、いやそもそも自分がどこにいるかもわからない、そんな私たちの人生を歌う歌だからこそ長く愛される歌なのでしょう。私たちもその人生という道を歩む中で何度迷い道をくねくねと歩んできたことか、いえ今まさに迷い道をくねくねと歩いているのかもしれません。**

**それは今日の聖書箇所で言えば目が見えなくなり誰か手を引いてくれる人を探しているバルイエスと同じです。どこにいけばいいのか、自分がどこにいるのかもわからずにまっすぐに歩くことができずに曲がりくねってうろうろとくねくねと迷い道を歩かざるを得ないのです。**

**イエス様はヨハネによる福音書14：6で言われます「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」人生という迷い道をくねくねと歩き、その道が見えなくなり自分がどこにいるのかもわからなくなっている私たちに言われます。「私の道を歩きなさい」「私の道はまっすぐに父なる神に通じている」「そしてその道は永遠の命へとまっすぐに通じているのだ」と。そう言って誰か手を引いてくれる人を探している私たちの手をイエス様はしっかりと握りその手を引いて下さるのです。私たちをまっすぐな道へと導いて下さるのです。**

**私たちは手を引いて下さるイエス様の手をしっかりと握りしめて一緒にまっすぐに歩いていけばいいのですが、様々な試練や誘惑の中でまっすぐな道もイエス様の手も見えなくなってしまうのです。そしてまたくねくねふらふらとまっすぐな道から迷い出ようとしてしまうのです。**

**そしてやっかいなのが自分はしっかりとまっすぐな道が見えているとの自信から、せっかく手を引いて下さるイエス様の手を振り払ってしまうのです。自分一人で歩こうとするのです。自分は見えている、その自信が過信になってしまった時、かつてのパウロがそうであったように自分が見えなくなるだけでなく、人をまっすぐな道から曲げてしまって迷い道へと引きずり込んでしまうのです。**

**ですから、私たちにとって大切なことは私は何も見えていない、手を引いてくれるお方がいなければまっすぐな道を歩けない小さな者にすぎないと謙虚な思いを決して忘れないことです。たとえ信仰生活うん十年と歩みを進めても、その歩みはイエス様に手を引いていただいているおかげで信仰の道を、永遠の命に続くまっすぐな道を歩くことができている、その感謝を決して忘れないことが大切なのです。迷い出ようとしてしまう私たちの手をしっかりとひいて、「こっちだよ」とまっすぐな道を歩かせてくださるイエス様の手をしっかりと握りしめて、私たちの足元はおぼつかなくてもイエス様に信頼して、永遠の命を目指して信仰の歩みを進めていきましょう。**